



第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／川上 壮 島根県雲南市教育委員会学校教育課 派遣社会教育主事
小橋口 誠 鹿児島県南さつま市教育委員会 生涯学習課 課長

分科会の進め方 13:30~13:35

1 木ヶ津千灯籠春まつり 13:35~14:05
～住民による住民のための地域活性化事業の構想と戦略～

村 節雄(長崎県平戸市) 木ヶ津千灯籠春まつり実行委員会 実行委員長

10年前、地域活性化を目標に、青年団、老人会、婦人会、子ども会のメンバーが実行委員会を結成。地元「普門寺」を中核とした「木ヶ津千灯籠春まつり」を企画した。構想は桜の季節に合わせ、地域全体を会場とした住民総参加の祭りである。既存の石灯籠100基に、地元手づくりの竹灯籠4,000本が夜の町を幻想的に照らし出す。実行委員会は「じのもの市」と称する直売会や昔遊びの体験プログラムなどイベントを企画。上がった収益金は地元の活動団体の活動資金として還元している。10名で始めた実行委員会は現在、50名を擁し、祭りの集客力は5,000人を越え、商会議所や博物館の協力も得られるようになった。祭りを契機に町を美しくするボランティアの町内清掃が行なわれるようになり、住民の参画意識が向上した証であると考えている。

2 「家庭」と「学校」、「親」と「子」、「親」と「親」、「行政」と「支援チーム」を 14:10~14:40
つなぐファミリーサポーターズ「和」

徳永 清美(福岡県大木町) 大木町教育委員会 家庭教育支援員

平成20年度、県の「家庭教育支援基盤形成事業」の委託を受けて「家庭教育支援チーム」がスタートした。チームは、3小学校それぞれに子ども支援の経験を有する専従1名、短期1名、合計6名で編成し、親子関係、不登校、子育ての孤立などの問題を、標記の関係者を繋ぎながら直接・間接に支援している。方法上の工夫は「機動性」、「アウトリーチ訪問型」、出会いや相談の場を提供する「オープンカフェ」、学校と連携した「登校サポート」、「支援会議」などである。成果は子育て孤立の解消、不登校の食い止め、教員と支援チームの信頼関係や学校と行政が連携して親子の育ちを支援する環境が向上していることである。

ティータイム 14:40~15:05

3 親の学びを核とした乳幼児から自立までの 15:05~15:35
循環型子育て支援プログラムの意義と方法

赤迫 康代(岡山県備前市) NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事

循環型支援とは、本事業で「学んだ親」が、子どもが成長する時間軸の中で、「地域で活躍する人材」となり、やがては「子育てを支援する側」に育って行くシステムを想定している。プログラムは「岡山いきいき子育て応援事業」や「地域子育て支援拠点事業」を有機的につなぐと同時に本事業のコーディネーターを始め関係者が「岡山子育てネットワーク研究会」で学習を継続した。「指導」より「自らの学び」に焦点をあて、参加者を繋ぐコーディネート機能を重視した。近年特に、父親の参加を重視した結果、父親自身が主体的に企画に参画するようになっている。これからの課題は人々の参加を待つに留まらず、支援を届ける「アウトリーチ型」の方法を強化したいと考えている。

4 加治木(笑)劇場「華の会」 15:40~16:10
～スクリーン(映像)紙芝居に夢を託して～

馬場ひとみ(鹿児島県始良市) 華の会 会員

「華の会」は、児童文学者椋鳩十先生の文学発祥の地、始良市加治木町にある椋鳩十文学記念館で毎年開催されるマヤフェスタ(子どもの祭典)にボランティア参加。時には、地元加治木高校生とのコラボレーションという形で共演している。

「加治木(笑)劇場」は、地元加治木の文化財をテーマにした子ども向けのスクリーン(映像)紙芝居である。先人の残した文化財を過去の遺産として紹介するのではなく、時空を超え、自分たちと同じレベルでこの世に存在しているものとして登場する。現代に生きる子どもたちが、有形・無形の文化財を身近なものとして認識し、次世代へと受け継いでいってほしい、そんな願いをこめ活動を続けている。